

私の経路

佐賀県 浦郷 布治衛

渡満の動機、当時佐賀県杵島郡農会技手として勤務、新婚一か年当地で生活中、昭和十三年三月政府要員として徴用令に接した。同年四月一日茨城県鯉淵、加藤完治高等学校長のもとで、全国各県選抜二百八十人幹候生の一人として入所、特別訓練期間満一か年の訓練を受けた。昭和十四年四月、終了と共に一時渡満準備として帰郷した。

当時は支那事変で、召集、出征兵見送り等で騒然とした空気の時代であった。自分も出征兵同様、両親や新婚の妻を残して町民の見送りで、町より下附された祝壮途の肩タスキをかけて、家族は勿論、多勢の町民と訣別、東京麻布青年会館に集合した。

当時、拓務省小磯国昭大將が大臣であり、同省官房で小磯大臣直々で訣別の祝宴が開かれた。満州建国は日本の国であり、第一線兵士同様建国精神に燃え、国のた

め武運長久を祈るといふその言葉に従って壮途につく。新潟港より輸送船日本丸に乗り込み、日本海横断、佐渡が島東端を通過する時、これが最後になるやも知れぬと島との別れも胸のうちにさめた。四十八時間にして朝鮮裏元山港上陸とともに関東軍差し回しの列車に乗り込み、豆満江を渡ればもはや南満州の曠野。初めて見る大陸の曠野は果てしなく続き、車中で戦友と語り、この大地に骨を埋める決意新たにした。

故郷に残した家族、新妻の面影を頭に浮かべるうちに、安山製鉄所のもうもうと立ち登る煙に見とれて感慨は無量。夜に入るところ奉天駅を通過し、夜間も友と語りなかなか寝つかれない。夜中ごろ長春即ち新京通過、いつの間にか眠り双城駅付近で目を覚まし、朱塗りの楼門をちらっと見て、翌朝、哈爾濱駅に到着した。到着と同時に中隊長の命令でホームに降り立って、駅表ホームに伊藤博文翁の胸像の硝子箱の中をのぞき敬礼を表した。

駅前に出てみると、まさしくエキゾチックな感に打たれ、ニレの古木が新芽を吹き出して、その間にロシア住宅が立ち並んで屋上に突き出た煙突よりかすかな排煙が

出ているさまは、日本では見たこともない町並みの情景でもあった。さしあたり哈爾濱駅より軍差し回しのトラックに乗り、北満の曠野をひた走り、着いた所は哈爾濱特別青少年義勇隊大訓練所である。

当時、所長飯島連次郎閣下のもとで、第二中隊付職員として十六歳から十九歳位の青少年義勇隊の指導に当たることとなり、着任そこそこで第二兵舎第一号室を与えられた。

起床六時、夜就寝午後九時まで青少年相手に猛訓練を毎日繰り返した。時には夜中に匪襲等があり、装備怠らず隊員と共に屯子に出かけることも幾度か、討伐も繰り返し夜もろくろく眠られない。昼は銃剣捨てて農作物の除草チュウトウ肩に作業を行う。また、その他時間帯に従って教育軍事訓練と片時も休む暇もなく、第一線兵士に劣らぬ行動を開始してやっ一期の検閲を経たころ、体調に異変を起こした。左の腕がつまり上がり急性神経痛になり、室内に休むこととなり、諸手当も効なく内地療養となって、一か月休暇をとって帰郷した。

内地はお盆であり、早速病院に行き、入院は要しない

ということ通院で約一か月後、もとの体調となり、満州興農部稲垣征夫技監より直ちに再渡滿せよとの電報を受け取り、九月初めに再度町民の見送りを得て単独で渡滿し新京満州国興農部に出頭した。そして、義勇隊には不適當であるという理由のもとに、当時浜江省農事合作社聯合会に配転を命ぜられ、当聯合会庶務課調査係として勤務した。

浜江省は一市十二県の実態調査等約一年ばかりで、昭和十五年農事金融両合作社統合となり、浜江省興農合作社聯合会と改称、内部機構も改められた後、理事長室付人事係長として四か年間勤務。そのうち官舎も渡り、寒い中に妻の渡滿一人旅で哈爾濱にやってきて再び心機一転、新婚生活に入る。夾樹街官舎であった。

独身時代はハルピン憲兵隊宿舎に同居して憲兵隊との交流の道もあり、在滿日系兵役関係等と兵事事務等も取り扱った。昭和十六年十一月四日左傾主義者一斉検挙。同年十二月八日、ハワイ攻撃によって第二次世界大戦が布告された。

満州国は五族協和を旗印に建国精神にあおられ、その

間日本軍は連戦連勝に意気さかんで南方諸島へ戦線拡大されたが、連合艦隊はミッドウェイ海戦に敗れて敗退の色濃くなった。昭和十九年七月一日付で巴彦鼎農合作社理事事として転勤命令を受け、当合作社在任中の昭和二十年七月、現地応召となって再び北滿の地巴彦鼎を後に、妻子を残して第四管軍区独立混成旅団に入隊することに。今でも忘れぬ妻子はじめ兄弟や中国人たちの見送りを得て、哈爾濱市キタイスカヤ街公園で訣別の日がきた。

子供は三歳頭に一歳の二人を妻に託し現地に残しての応召、郷里の父母のことなど脳裏に浮かび、現地応召を受けた以上生きて帰れるとは考えられない。日本軍は敗退の色濃くなるばかり、運命は何を与えられているか計り知れない事態となった。妻は二人の子供を抱えて留守居を守ることは内地とは異なり、異郷の地での訣別である。涙も出ぬほどの悲壮な思いで無言のまま、親しくしてくれた中国人姜刺由と王錦併のご厚意に依存して、後には宜しくくれぐも頼む以外に道はなく、当時記念写真を撮って訣別したのであった。

入隊して約一か月後の昭和二十年八月八日、ソ連は不可侵条約を一方的に破棄して宣戦布告して、重戦車三百台で牡丹江と満ちゅ里より満州国内に侵攻してきた。わが旅団も八月九日午後九時出動命令あり、わが中隊も土砂降りの雨の中に原隊を出動、真の暗やみの中を重機を主体として進軍せるも、ソ連の重戦車部隊に立ち向かうほどの気力もなく、破竹の進撃に後退の余儀なし。ついにわが中隊も銃弾に倒れ残り少なくなり、敗退の運命に追い込まれ、八月十五日哈爾濱へと逆戻りしたのである。

ハルピンに来てみれば、八月十五日全面降伏の詔勅ラジオ放送があった直後、桃山小学校で武装解除となり、シベリヤ抑留部隊はどんどん送られていく。自分の中隊も中隊長の話ではモスコカウクライナ方面への捕虜收容所行きではないかとのことで、無蓋車に乗ったは乗ったが、捕虜になってシベリヤに行くのはどうしても気に入らない。とうとうヤブリ駅で汽車が止まったのを幸いとして、単独で歩いて一面坂まで行くことを決意して、列車から飛び降りて中隊長に一言伝えてポーラした。

すると、俺も俺もと汽車から降りる者十人となり、中

隊と別れて自由行動を取り、軍服姿ではソ連軍に見つか
る、銃殺にあうのは当然のことゆえ、屯子に行つて満服
と交換をして変装することとした。十人一団となつて昼
夜を分かつたず歩き、空腹になれば包米を拾つて食べる方
法しかない。

八月二十八日、やっと一面坡にたどり着いたはよいが、
夜の暗やみの中ドアイドアイとソ連軍の野営歩哨に取り
囲まれて再び捕虜となり、逃げた者は銃殺となり、自分
は逃げ遅れて捕らえられ手錠をはめられて車につながれ、
雨の中。雨がやめば蚊の大群に襲われて生きた気持ち
はない。辛惨苦勞の夜も明け渡り、一面ソ連軍の幕舎が
広がっている。戦友の姿は一人も見えずどうなつたか、
もう生きた心地はしない。夕方近くなつたころ、司令官
の呼び出しとあつて歩哨が前後に銃剣つけて大きな家
行き、司令官と通訳と自分の三人一室にあつて司令官の
尋問あり、約二十分位で終わった。そして、この街はず
れに日本人がたくさん収容されているからそこへ行け、
また捕まったら銃殺に処すからと言つて、町にほうり出
されたときの嬉しさ、言語に絶する思いであつた。

収容所の裏門から入つたら、大きな釜の下には火が赤々
としている向こうの方から、「浦郷君ではないか。今こ
ろ一人でどこから来たか。」と尋ねられたが、涙がぼろ
ぼろ流れて言葉は出ない。自分だけが殺されず生きてき
た今、本気に戻り、やっと生き返つた氣になつたことの
喜びである。相手は同期の幹候生の田中君であつた。

その後は一般邦人の仲間となつて行動を共にするこ
ができた。八路軍の使役等を重ね十一月十七日忘れ得ぬ
日、解放されて哈爾濱に帰れたのであつた。この間の辛
惨苦勞は言葉に尽くせないものがあり、死線を幾度か越
えて今日あるは妻子との再会もあらんと、日本人居留民
団事務所前で馬車の上立つて手作りのリュックを抱え
て肩に掛けようとした時である。どこから今ごろ出てき
たのか引き揚げ者の群れと出会い、北滿の奥地からの避
難民だろつとの思いの外、巴彥県収容所からの者で、奇
跡的にも偶然に妻子との対面ができて嬉し涙がこぼれる
のであつた。

お互いに元氣な姿を見て、嬉し涙とは今のことかと思つ
たのである。一人の子供は収容所で栄養失調のため亡く

なったとのこと、三歳になる子供だけ着のみ着のまま何一つ持ち物もない有様で、「公安隊に家財一切没収され、ほうり出され、苦しい生活を続けてきました。本当に体だけで、一物も持ってこれなかった。」と妻は泣きながら一部始終を話して、「乞食よりもまだひどい有様であった。生きて再び会えたことが何より……。」と。自分だけでない日本人全部がそうである以上、やむを得ぬことであるからと、再会ができてこんな嬉しいことがあるものかと共に慰め合った。そして、哈爾濱で引き揚げまで苦労はあっても我慢していこうと契り合った。

昭和二十一年八月、引き揚げ命令が出て、約五十五日間もかかって佐世保南風崎港に上陸したのが十一月であった。

約十年近く、一番働ける時が空白になったことが今なお頭の中に残り、苦難の道を切り開くことは容易ではない。尊い命運は死んでも忘れることはできない自分の一生。既に八十五歳の高齢に達し、残り少ない寿命をどう開けるか、もはや遅しの感あるのみである。

旧満州国東三河郷開拓団顛末記

愛知県 瀧川 辰雄

昭和十四年六月四日、敦賀港を出航する移民輸送船、気比丸で、私は満州開拓愛知県第九次東三河郷建設基幹先遣隊二十人の一人として渡満した。そして第五次永安屯開拓団で約九か月間の現地訓練生として、木村直雄団長らから指導を受けた。当時の訓練生の月給は一円であった。今も語り草であるが、山鳥の雄が一羽一円で買えたから「雄一羽、月給の味、おわりけり」と言って笑いあったものである。とにかく安い月給だった。

入植地は興安省と竜江省の境界の大平原で十か所に開拓団（三千戸、一万五千人）を入植させ五年間で、一万ヘクタールの一大農業楽園地帯を構築する計画である。愛知県は一開拓団三百人を送り込んだ。しかし、耕地は低温地帯で雨となると河が氾濫して、農作物を流出させてしまう。